

フリードリヒ・エックシュタインとフーゴー・ヴォルフ — 音楽愛好家と作曲者の関わり —

梅林 郁子*

(2018年10月23日 受理)

Friedrich Eckstein and Hugo Wolf:
The Relationship between a Music Lover and a Composer

UMEBAYASHI Ikuko

要約

本稿は、音楽愛好家であったユダヤ人フリードリヒ・エックシュタインの著書と、友人で作曲者のフーゴー・ヴォルフの書簡記述を中心として、エックシュタインがヴォルフに対して行った支援の実態を、音楽愛好家と作曲者両者の視点から明らかにするものである。

エックシュタインのヴォルフに対する支援は、人物などの紹介と、物質的・金銭的な支援の二種類に分けられる。人物などの紹介としては、エックシュタインの著書にはヴォルフとブルックナーとの会食の設定が生き生きと描かれると共に、かなり控えめに出版社の紹介についてが言及されている。一方ヴォルフの書簡には、特にアメリカ行きを考えていた際に、当地で必要となるであろう後ろ盾の人物紹介依頼に関する記述があり、金銭的支援については、直接に借金を申し込んでいたり、また弟をエックシュタインの会社に雇ってもらった上で、弟がヴォルフから借りた金を、弟の給料から差し引きで払うよう依頼したりするなど、具体的な援助依頼が見られる。全体として、エックシュタインの著書では、主に人物紹介や物的支援についての思い出が記されているのに対し、ヴォルフの書簡では、かなり生活に直結した人物紹介や金銭的支援を依頼している様子が窺える。

またヴァグネリアンであったヴォルフは、反ユダヤ主義の理念を掲げていたが、実際のところ、両者の記述内容から、このような考え方が二人の関係に影を落とすことは無かったと考えられる。

キーワード：フーゴー・ヴォルフ、フリードリヒ・エックシュタイン、音楽愛好家

* 鹿児島大学 法学教育学域 教育学系 准教授

1. はじめに

フリードリヒ・エックシュタイン Friedrich Eckstein (1861-1939) は、ユダヤ人の家系に生まれ、父アルベルト Albert (1824-1881) の設立した製紙工場の共同経営者として経済的に豊かな環境で育つと共に、博識かつ勤勉な知識人として、ウィーンを中心に学者や芸術家と幅広い交友関係を築いた。また彼は音楽を大変に愛し、アントン・ブルックナー Anton Bruckner (1824-1896) の弟子でありながら個人秘書を務めると共に、この関係を越えて金銭的・物質的な支援も行い、彼の芸術活動を支えたのである。筆者は、梅林 2017、2018 の研究論文においてエックシュタインの人物像を示し、彼の既出版の著書『アントン・ブルックナーに関する思い出 *Erinnerungen an Anton Bruckner*』(1923) (以下、『思い出』と略記) と、未出版の原稿「アントン・ブルックナー。音楽理論体系 Anton Bruckner. System der Musiktheorie」(以下、「音楽理論体系」と略記) (オーストリア国立図書館所蔵、執筆年不明)¹ 序文の記述を考察することで、エックシュタインのブルックナーに対する支援の実態や、弟子・秘書としての活動の詳細を明らかにした。一方で、ブルックナーが残したエックシュタインに関する文書は書簡が1通のみで²、エックシュタインの支援活動について、ブルックナー自身が下した直接的な評価を考察するには材料が不足している。

一方、エックシュタインが関わりを持った作曲者はブルックナーだけでなく、もう一人フーゴー・ヴォルフ Hugo Wolf (1860-1903) が挙げられる。エックシュタインとヴォルフは1882年にウィーン市内で知り合って以降³、年が近いこともあり、生涯にわたって友人として付き合い続けると共に、エックシュタインはブルックナーに対してと同様、ヴォルフを様々な形で支援した。エックシュタインはヴォルフとの友情や支援の活動について、著書『昔の、言い表せない日々 — 修行と遍歴の70年からの思い出 *Alte, unennbare Tage — Erinnerungen aus siebzig Lehr- und Wanderjahren*』(1936) (以下、副題は略して表記)⁴ で言及しており、ヴォルフの側もエックシュタイン宛て、或いは友人たちなどに宛てた多くの書簡のなかで、エックシュタインについて記している。そこで本研究では、これらの資料を考察対象として、音楽愛好家エックシュタインと作曲者ヴォルフという両者の視点から、二人の関わりやエックシュタイ

¹ オーストリア国立図書館には、「音楽理論体系」について自筆稿やタイプ打ちなど複数の原稿が残されているが、目録番号 Mus.Hs.29333/1-3 として保管されているタイプ打ち原稿が、所蔵されている中では一番最終稿に近いと考えられる。この原稿の執筆年は不明だが、序文で『思い出』に言及している（「音楽理論体系」:4）ため、1923年の『思い出』出版以降に書かれていることは確実である。

² ブルックナーが残した書簡は、オーストリア国立図書館 Österreichische Nationalbibliothek と国際ブルックナー協会 Internationale Bruckner-Gesellschaft 共同編の書簡集にまとめられているが、このうちブルックナーからエックシュタインに宛てた書簡は1884年12月4日付の1通（Österreichische Nationalbibliothek; Internationale Bruckner-Gesellschaft (Hrsg.) . 2009. I:242）のみである。

³ 二人が出会った場所として、エルンスト・ヒルマー Ernst Hilmar と国際フーゴー・ヴォルフ協会はウィーン市内のカフェ・グリーンシュタイドル Café Griensteidl を挙げている（Hilmar 2007:92、Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft 2011 493）が、フランク・ウォーカー Frank Walker は市内の菜食レストランとし、ここでの二人の出会いの状況を詳細に述べている（Walker 1992:134）。

⁴ この著書のタイトルは、エドゥアルト・モーリケ Eduard Mörike (1804-1875) の詩「春に Im Frühling」の最終行から付けられている。この詩は1888年にヴォルフによって作曲され、《モーリケ歌曲集 *Gedichte von Eduard Mörike*》(1888年作曲) に収められた。

ンがヴォルフに行った支援の実態を明らかにする。

2. 考察対象の資料

考察対象資料は、下記のエックシュタインの著書とヴォルフの書簡を中心とするが、二人の関係は複数の先行研究においても概要が記されているので、適宜これらの先行研究も参照する。

2.1. エックシュタインの著書

エックシュタインは、著書『昔の、言い表せない日々』のなかで「フーゴー・ヴォルフ Hugo Wolf」という項目を設け (Eckstein 1936:157-191)、ヴォルフとの関係や思い出について語っており、本稿ではこの箇所を考察の対象とする。この「フーゴー・ヴォルフ」の項目は、「フーゴー・ヴォルフとアントン・ブルックナーの最初と最後の出会い Die erste und die letzte Begegnung zwischen Hugo Wolf und Anton Bruckner」(ibid.:159-167)、「同居人としてのフーゴー・ヴォルフ Hugo Wolf als Hausgenosse」(ibid.:168-176)、「フーゴー・ヴォルフとフリードリヒ・ニーチェ Hugo Wolf und Friedrich Nietzsche」(ibid.:177-182)、「ピアノ調律師としてのフーゴー・ヴォルフ Hugo Wolf als Klavierstimmer」(ibid.:183-187)、「フーゴー・ヴォルフと文学 Hugo Wolf und die Literatur」(ibid.:188-191)の5つの小項目に分けられている。

2.2. ヴォルフの書簡

ヴォルフが家族や友人たちに宛てて残した書簡は、国際フーゴー・ヴォルフ協会 Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft 編による書簡集にまとめられている。うち、エックシュタインに直接宛てられた書簡は、1887年11月20日から1896年7月17日までに24通が残されている。また、家族や友人たちに宛てられた書簡で、エックシュタインや彼の家族に関連した事項が記載されているものは、1888年2月24日から1897年7月1日までの49通に上る(但し、このなかには一時期エックシュタインの家に住んでいたヴォルフが、住所を知らせるためにエックシュタインの名を出している程度の書簡も含まれる)。本稿では、これらの計73通の書簡を考察対象とする。

3. エックシュタインの著書にみられるヴォルフへの関わりと支援活動

エックシュタインは、ヴォルフに様々な支援を行ったが、友人としても多大な影響を及ぼした。当然のことながら、彼はヴォルフに対して友人・支援者のどちらともつかない行動も多く取っているが、本項では、エックシュタインの行動を、他の作曲者の紹介という、広い意味でヴォルフの音楽に影響を及ぼしたであろう活動と、明確な物質的・金銭的支援活動の二種類に大きく分けて考察を進める。

3.1. ヴォルフとブルックナーの会食の設定

エックシュタインが仲介してヴォルフに引き合わせた人物は多いが、最も注目すべきは作曲家のブルックナーであろう。エックシュタインは1881年にブルックナーに弟子入りした後⁵、彼に音楽理論や作曲を学んでいた。翌1882年にエックシュタインはヴォルフとも知り合っていたが、ブルックナーとヴォルフの両作曲者には交流が無かった。一方、ヴォルフは1884年1月より、貴族階級の娯楽新聞である『ウィーン・サロン新聞 *Wiener Salonblatt*』に音楽批評文を執筆しており⁶、そこでは当初、かなり辛辣なブルックナーに対する批判を繰り返していた。例えば、1884年12月28日に掲載された「ブルックナー？ ブルックナー？ 彼は誰なのか？ 彼はどこにいるのか？ 彼には何ができるのか？」⁷ (Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft 2002, 1:74) で始まる「ブルックナーの夕べ Bruckner-Abend」と題された記事には、次のような文章が見られる。「知性に関する欠如、これがあらゆる独創性、偉大さ、力、想像力、そして着想のもとにあるブルックナーの交響曲を、私たちに理解し難くしているものだ。至るところに意欲、大規模な滑り出しがあるが、どこにも充足、芸術的な解決が無い。⁸」 (ibid.:75)。このようなヴォルフの批評について、ブルックナーを良く知るエックシュタインは、「ブルックナーは、当時の日々の批評を通じての敵対的な扱いに対して、確かに既にかかなり神経をすり減らしていたが、まさしく『サロン新聞』におけるフーゴ・ヴォルフの否定的な発言を、特に辛く感じたに違いなかった。⁹」 (Eckstein 1936:162) と述べている¹⁰。エックシュタインはこの状況をどうにか改善できないかと考えたが、その機会は意外にも早く訪れた。なんとヴォルフはエックシュタインに対して、ブルックナーの交響曲第7番 WAB107 (1884年初演) に対する「改心」を語ったのである (ibid.)¹¹。これ幸いとエックシュタインはヴォルフに対し、ブルックナーに会って見ないかと持ちかけたところ、「ヴォルフは私の考えについて、ただちに熱狂的に受け入れ、まもなくこれに関して、私はブルックナーの嬉しそうな同意も得た。¹²」 (ibid.) と

⁵ エックシュタインがブルックナーに出会った時期や弟子入りした日付、また弟子入りの状況などについては、梅林 2017:120-121 を参照されたい。

⁶ 『ウィーン・サロン新聞』は、1884年1月から1887年4月まで、コンサートやオペラの夏のオフシーズンを除き、毎月数編のヴォルフの音楽批評文を掲載していた。批評文の掲載状況や、掲載の過程などについては、梅林 2006:68-69 を参照されたい。

⁷ Bruckner? Bruckner? wer ist er? wo lebt er? was kann er?

⁸ Der Mangel an Intelligenz, das ist es, was uns die Bruckner'schen Symphonien, bei aller Originalität, Größe, Kraft, Phantasie und Erfindung so schwer verständlich macht. Ueberall ein Wollen, colossale Anläufe, aber keine Befriedigung, keine künstlerische Lösung.

⁹ Bruckner, gegen die feindliche Behandlung durch die damalige Tageskritik zwar schon einigermaßen abgestumpft, mußte nun aber gerade Hugo Wolfs abfällige Bemerkungen im „Salonblatt“ besonders schmerzlich empfinden.

¹⁰ ブルックナーのみならず、ヴォルフの音楽批評はしばしば非常に攻撃的な論調が散見されるが、後年のヴォルフは、若かりし頃の自身の批評を全く評価していなかったようである。後にエックシュタインが批評文を本にして出版したらどうかと勧めたところ、ヴォルフは椅子から飛び上がってエックシュタインに突進し、「絶対にだめだ！ そのことは話さないでくれ！ 神様がこの記事のことを近いうちに完全に忘れさせていただきますように！ それに、充分償うのだから。誰かがそれを暴き出し、もう一度印刷するだろうこと以上に私を苦しめるものはないのだ。Never! Don't talk about it. May God grant that these articles be soon entirely forgotten, as they richly deserve! There is nothing that could harm me more than that somebody should unearth them and print them again.」と述べたとされている (Walker 1992:161-162)。

¹¹ ブルックナーの交響曲は、初演が1884年12月30日にライブツィッヒで、2回目の演奏が1885年3月10日にミュンヘンで行われている (Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft 2002, 2:92)。ヴォルフの「改心」は、このどちらかの演奏を聴いたためか、または楽譜を手に入れるなどして曲を知ったためなのかは不明である。

いう結果となった。

こうして、1885年の聖体の祝日¹³の午後に、ウィーン近郊のクロスターノイブルクのレストランで会食が設定され、エックシュタイン、ヴォルフ、ブルックナーの他にヨーゼフ・シャルク Joseph Schalk (1857-1900)¹⁴、フランツ・シャルク Franz Schalk (1863-1931)¹⁵、フェルディナンド・レーヴェ Ferdinand Löwe (1863-1925)¹⁶、ツイリル・ヒューナイス Cyrill Hynais (1867-ca.1914)¹⁷、ユリウス・マイレーダー Julius Mayreder (1860-1911)¹⁸、ローザ・マイレーダー Rosa Mayreder (1858-1938)¹⁹の6名が、共に食卓に着いた。エックシュタインに拠ると、この会食はオペラの題材についてや、知人のおもしろおかしい噂話などで盛り上がり、大変な成功を収めることとなり、この後、ヴォルフがブルックナーの住まいを訪れたり、ブルックナーの方ではヴォルフを「ヴォルファール Wolferl」と呼んで可愛がったりするなど、ふたりは良好な関係を築くこととなった (ibid.:164-165)。

その後の『ウィーン・サロン新聞』におけるヴォルフのブルックナー作品評は、非常に好意的なものへと転じた。1886年3月21日に、ブルックナーの交響曲第7番がウィーンで初演されるが、ヴォルフはこれを聴き、「成功は完璧だったし、聴衆は魅了され、拍手は割れんばかりだった。しかし、フィルハーモニーの管弦楽団員は、まだ半ダースものブルックナーの交響曲が、彼の書き物机のなかにあって上演を待ちわびており、そのなかでこのホ長調の交響曲よりも重要性の劣るものですら、ブラームスの交響曲のモグラの盛り土に比べれば、チンバツソのようだというのを、考えても良いだろう。²⁰」(Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft 2002, 1:149)と、第7番の成功を伝えると共に、ブルックナーの他の交響曲もさらにウィーンで上演されることを強く願う批評を書いている。

また、エックシュタインはブルックナーに関連して、正確な年月日は不明だが次のようなエピソードも残している。ある日、ヴォルフがソファで休んでいた側で、エックシュタインがブルックナーの和声の課題をハルモニウムで弾いていたが、休憩を取ったところ、ヴォルフはエックシュタインに悲しげに次のように述べた。「なぜ、君は続きを弾かないの？ それは本当に、言葉に表せない程美しいのに！ 一体それは、なんという変わった響きなのだろう？²¹」と(『音楽理論体系』:3)。ヴォルフは、エックシュタインが弾いていた曲が、ブルックナーの課題

¹² Wolf war für meine Idee sogleich enthusiastisch eingenommen und bald darauf erhielt ich auch Bruckners freudige Zustimmung.

¹³ 移動祝日で、この年の日には明確でないが、5月下旬から6月下旬

¹⁴ ピアニスト、指揮者。ヴォルフの友人でブルックナーの弟子。フランツ・シャルクの兄。

¹⁵ ヴァイオリニスト、指揮者。ヴォルフの友人でブルックナーの弟子。ヨーゼフ・シャルクの弟。

¹⁶ ピアニスト、指揮者。ヴォルフの友人でブルックナーの弟子。

¹⁷ 作曲者。ブルックナーの作品の編曲も行った。

¹⁸ 建築家。エックシュタインとヴォルフの友人

¹⁹ 文筆家、画家、女権論者。後に、ヴォルフのオペラ《お代官様 *Der Corregidor*》(1896年初演)の台本を執筆する。ユリウス・マイレーダーの兄である建築家のカール・マイレーダー Karl Mayreder (1856-1935)の妻。

²⁰ Der Erfolg war ein vollständiger, das Publikum hingerissen, der Beifall betäubend. Die Philharmoniker aber mögen bedenken, daß noch ein halb Dutzend Bruckner'sche Symphonien, im Pulte liegend, ihrer Aufführung harren und daß unter diesen, selbst eine minder bedeutende, als die in E-dur, noch immer ein Cimborasso ist gegen die Maulwurfshügel der Brahms'schen Symphonien.

1886年3月28日の批評文。尚、文中の Cimborasso は Cimbasso と捉えて訳した。

²¹ Warum spielst Du nicht weiter? Das ist ja unbeschreiblich schön! Was sind denn das für merkwürdige Klänge?

であると知り、大変驚くのだが、このような形で彼の作品や指導の一端を垣間見ること、肯定的な評価が続くきっかけになった可能性がある。ブルックナーが亡くなる半年ほど前にも、ヴォルフはベルリンでフーゴー・ヴォルフ協会を設立したパウル・ミュラー Paul Müller (1848-1917) 宛ての書簡で「ブルックナー — 彼は、生きている者のうち飛び抜けて偉大な巨匠であり、私は彼の前では頭を下げる。²²⁾」(Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft 2010, 3:109、1896年5月2日付) という非常に高い評価を下している。こうしてヴォルフは、ブルックナーに会う以前から、交響曲第7番を良いと感じてはいたが、エックシュタインの紹介で本人に会って懇意となったり、また間接的に彼の指導法を知ったりしたことも、後々にまで続く高評価に繋がったと考えられるのである。

3.2. 物質的・金銭的支援活動

3.2.1. 物質的支援

ヴォルフは晩年となる1896年7月まで自分の家を持たなかったため、ほぼ生涯にわたって多くの友人・知人の支援を受け、数えきれないほどの転居もした。引っ越し先は、彼らの家に同居したり、別荘を借りたりということが多く、エックシュタインもヴォルフに家を提供した者のひとりだった。エルンスト・ヒルマー Ernst Hilmar は、「ヴォルフは何度もジーベンブルンネン通り15番地のエックシュタインの家にも（例えば1888年の夏と秋、1894年の10月と12月から1895年の3月まで）、またウンターラッハ・アム・アッターゼーの彼の別荘にも（1888年の秋 — そこで彼は《メーリケ歌曲集》を作曲した —、1890年5月と同じく1891年5月）宿泊した。²³⁾」(Hilmar 2007:93) と述べている。つまり、ヴォルフの初期の代表作《メーリケ歌曲集 *Gedichte von Eduard Mörike*》(1888年作曲) も、エックシュタインが提供した安定した環境あってこそその作品だったのである。

また、晩年に持った自宅も、多くの友人・知人の支援があつてようやく可能となったのだった。そしてこの引っ越しについても、エックシュタインはほとんど厚かましいとも言えるヴォルフからの次の書簡を、著書のなかで公開している。「親愛なるフリッツヒェン！ 私が椅子、小さな机、そしてメーリケの絵を取りに行かせられる日を、どうか決めて欲しい。私はここに挙げた品を差し迫って必要としている。²⁴⁾ (文中の下線は原文に拠る)」(Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft 2010, 3:179、エックシュタイン宛書簡 1896年7月17日付)。もちろん、椅子と机は、エックシュタインが、居候であるヴォルフが円滑に作曲できるように使わせていたものだったし、エドゥアルト・メーリケ Eduard Mörike (1804-1875) の絵も、元はと言えばヴ

²²⁾ ... Bruckner, der freilich ein grosser Meister vor dem Herrn u. der Einzige unter den Lebenden ist, vor dem ich mich beuge.

²³⁾ Wolf nahm mehrmals bei E. Quartier sowohl in der Siebenbrunnengasse Nr. 15 (z. B. im Sommer und Herbst 1888, Oktober und Dezember 1894 bis März 1895) als auch in seiner Villa in Unterach am Attersee (Herbst 1888, wo er an den Mörike-Liedern arbeitete, Mai 1890 und gleichfalls Mai 1891) .

²⁴⁾ Liebes Fritzchen! Bitte, bestimme einen Tag, an welchem ich die Seßel, das Tischchen u. das Bild von Mörike abholen laßen kann. Ich benötige dringend die genannten Dinge.

ヴォルフがまだ《メーリケ歌曲集》を作曲している 1888 年の「話題に挙げている目的のために、詩人の若き日の絵を一枚調達できないか、メーリケ歌曲集の出版社に問い合わせして下さい。でも、急いで、急いで、急いで。メーリケはクリスマス前に出版されなければならないし、そうでなければ、あなたを殺し、自殺します。²⁵（文中の下線は原文に拠る）」(ibid. 1:280、エックシュタイン宛書簡 1888 年 10 月 8 日付) という物騒なわがままに始まっている。これを受けてエックシュタインはメーリケの絵をリソグラフで入手するのだが、さらにエックシュタインはこの引き伸ばしを作らせてヴォルフの誕生日に贈り、彼はこの予期せぬプレゼントに大変喜んだのである (Eckstein 1936:169-170)。

さらに先に引用した引っ越しの際の書簡には、次のような追伸がある。「14 日前の大引っ越しの際に、君の昔のニーチェ版の大部分が、私の本の下から見つかるという、驚くべき発見をした。(中略) 君にこの本を送る方が良いだろうか? ²⁶」(Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft 2010, 3:179、エックシュタイン宛書簡 1896 年 7 月 17 日付)。これも、1892 年にヴォルフがスウェーデンの詩人オーラ・ハンソン Ola Hansson (1860-1925) のフリードリヒ・ニーチェ Friedrich Nietzsche (1844-1900) に関する著作を読んで自分もニーチェを読みたくなり、全集を持っているエックシュタインに貸してくれるよう頼んだことが元となっている (Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft 2010, 2:66、エックシュタイン宛書簡 1892 年 3 月 30 日付)。エックシュタインは非常に多くの蔵書を持ち、「彼の部屋は、床から天井まで本と楽譜で覆われていた²⁷」(Walker 1992:134) が、大変気前の良いことに「彼は彼〔ヴォルフ〕に、自分の豊かに備えられた個人図書館を自由に使わせた²⁸ (文中の〔 〕内は筆者が挿入)」(Honolka 1990:93) のである。このときも、エックシュタインはヴォルフの求めに応じてニーチェの本を貸したようだが、そうするとこの本は、4 年以上もエックシュタインから借りたままになっていたことになる。確かにエックシュタインはヴォルフの友人であり、彼の作曲の才能を評価していたとはいえ、二人の書き残した資料を併せて見ると、エックシュタインは随分と寛大な人物であったと評価できるのではないだろうか。

3. 2. 2. 金銭的支援

ヴォルフは、今日では一般にリート作曲者と捉えられることが多い。しかし、多くの作曲家同様、ヴォルフも初めから順調に歌曲集出版に漕ぎ着けられた訳では無い。エックシュタイン本人は、「1887 年に (中略) 彼のリートのために、ある出版社を世話することに、遂に成功した²⁹」(Eckstein 1936:168) とあっさり述べているに過ぎないが、ヴォルフの最初の歌曲集出

²⁵ Schreiben Sie an den Verleger der Mörike'schen Gedichte, ob er Ihnen ein Bild aus den jungen Tagen des Dichters zum bewußten Zwecke verschaffen könne, aber schnell, schnell, schnell. Mörike muß vor Weihnacht erscheinen, sonst bring ich Sie u. mich um.

²⁶ Beim großen Umzug vor 14 Tagen machte ich die überraschende Entdeckung, daß der größte Theil deiner alten Nietzsche Ausgabe unter meinen Büchern sich vorfand, ... Soll ich Dir die Bücher zusenden?

書簡の収録状況については、註 24 と同様。

²⁷ ... his rooms were lined from floor to ceiling with books and scores.

²⁸ Er ... stellte ihm seine reichbestückte Privatbibliothek zur Verfügung, ...

版は、エックシュタインの支援があつてこそ実現が可能となつたのである。エックシュタインが世話した出版社とは、既にブルックナーの小品をいくつか出版していた、ウィーンのエミール・ヴェツラー Emil Wetzler であった (Walker 1992:199)。エックシュタイン自身はこの際の金銭的支援について明確にしていないが、出版に際し「彼本人がヴォルフの12曲のリートの費用を請け合う³⁰」(ibid. 199-200)と説明したとするフランク・ウォーカー Frank Walker を始め、複数の先行研究が同様の内容について言及している³¹。そして、この12曲こそが、ヴォルフの最初の出版譜で、1888年春に出版された《女声のための6つの歌曲 *Sechs Lieder für eine Frauenstimme*》(1877-1882年作曲)と《シェッフェル、メーリケ、ゲーテ、ケルナーの6つの詩による歌曲集 *Sechs Gedichte von Scheffel, Mörike, Goethe und Kerner*》(1883-1887年作曲)³²である。

ヴォルフにとって、自分の作品が出版される見通しが立ったことは、大変な喜びであつた。ヴォルフは当時、弁護士のエドムント・ラング Edmund Lang (1861-1918) と妻マリー Marie (1858-1934) の家に居候をしていたが、夫妻に頼んでベジタリアンのエックシュタインのために特別な料理を用意してもらい、「私はこれについて大事なことをあなたと話したいので、今晚私たちのところに軽い菜食の食事を取りにいらして下さい。³³」(Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft 2010, 1:249、エックシュタイン宛書簡 1887年11月21日付)と、彼をラング家に招待したのである。これがきっかけでエックシュタインはラング夫妻と知り合い、その後何度もラング家に出掛けることになるが、ヴォルフはエックシュタインが訪れると彼への感謝として、自作の未完オペラ《アルボイン王 *König Alboin*》(1876-1877年作曲)から〈万歳、アルボイン王、汝によって戦いは勝利する、汝、常に勝利する英雄よ *Heil König Alboin, gewonnen ist die Schlacht durch dich, du sieggewohnter Held*〉を演奏したり、またマリーたちも一緒になつてヴォルフの故郷のクリスマス・ソングを合唱して、皆でエックシュタインを迎えたりしたということであつた (Hilmar 2007:92-93)。

1887年5月以降途絶えていたリート作曲が、1888年に入つてすぐから爆発的な勢いで進み出し、この1年のみで《メーリケ歌曲集》全53曲、《アイヒェンドルフ歌曲集 *Gedichte von Joseph von Eichendorff*》(1880-1888年作曲)のうち13曲、《ゲーテ歌曲集 *Gedichte von Johann Wolfgang von Goethe*》(1888-1889年作曲)のうち25曲を含む計93曲という大量のリートを書き上げる背景には、前項で指摘したエックシュタインの安定した住環境の提供だけでなく、自

²⁹ ... im Jahre 1887, ... es mir endlich gelungen war, ihm für seine Lieder einen Verleger zu verschaffen, ...

³⁰ He would ... himself guarantee the costs of the publication of twelve of Wolf's songs, ...

³¹ 例えば Hilmar 2007:92 や、Jestremski 2011:127。しかし国際フーゴー・ヴォルフ協会は、エックシュタインは金銭的援助はせず、この出版はヴォルフの亡くなった父親の遺産から行われたと述べている (Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft 2011, 4:90, 99)。

³² この2つの歌曲集のうち、前者は「私の愛する母親に *Meiner lieben Mutter*」と献辞が付されてヴォルフの母親カタリーナ Katharina (1824-1903) に、後者は「私の親愛なる父親の思い出に *Dem Andenken meines theuren Vaters*」(ibid. 172)として亡き父フィリップ Philipp (1828-1887) に献呈された。

³³ Kommen Sie, da ich überdieß Wichtiges mit Ihnen zu besprechen habe, heute Abend auf einen vegetarischen Inbiss zu uns.

作が出版されるという喜びと自信も大きな役割を果たしたであろう。また、このうちの《アイヒェンドルフ歌曲集》と《ゲーテ歌曲集》について、ヴォルフは出版に際してエックシュタインから金銭的な支援を受けたという指摘もなされている (Jestremski 2011:189、Walker 1992:222)³⁴。こうして、エックシュタインは、ヴォルフの作品を世に出すために支え、またその支援に拠って作曲意欲に火をつけることにより、後世に彼の作品を残すための重要な役回りを演じたのである。

4. ヴォルフの書簡にみられるエックシュタインに対する要望と評価

前項までで、エックシュタインの著書を中心としながら適宜先行研究なども含め、エックシュタインが広くヴォルフに及ぼしたと考えられる音楽的影響と物質的・金銭的な支援活動について考察してきた。本項ではこれを踏まえ、エックシュタインから影響や支援を受けていたヴォルフ本人が、他に望み、受けた支援や、重ね重ね親切的な計らいを行ったエックシュタインに対する評価についてを、ヴォルフ側の書簡の記述から検討する。

4.1. ヴォルフの望んだ支援

「3.2.1 物質的支援」の項目で、ヴォルフがエックシュタインの蔵書を自由に使用していたり、またニーチェの本を借りたままにしていたりといったエピソードを記したが、このような状況は、例えば「33のメロディーが入っているベルリオーズの巻を持って来てください。³⁵」(Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft 2010, 1:321、エックシュタイン宛書簡 1889年10月23日付)や、「もし君が、スペイン詩集の巻を無しで済ませられるならば、それを明日か遅くとも明後日、グリーンシュタイドルに預けて欲しい。(中略)私はそれを今、至急で必要としている。³⁶」(文中の下線は原文に拠る) (ibid, 2:88、エックシュタイン宛書簡 1892年5月30日付)といったヴォルフの書簡の記述からも読み取れる。また、「3.2.2. 金銭的支援」の項目では、エックシュタインがヴォルフの歌曲集出版に際し、金銭的援助を行ったこと(、またはその可能性)を述べたが、ヴォルフの書簡には、より直接に「大至急：私に折り返し、20フローリン送ってください。³⁷」(文中の下線は原文に拠る) (ibid, 1:280、エックシュタイン宛書簡 1888年10月8日付)といった金銭的援助を求める記述も残されている。

これ以外にも、ヴォルフがエックシュタインから直接的、または間接的に受けた援助が大き

³⁴ 但し、国際フーゴ・ヴォルフ協会は、《ゲーテ歌曲集》について、エックシュタインが金銭的な援助を行った証拠は無いとしている (Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft 2011, 4:177)。

³⁵ Bitte bringen Sie den Band Berlioz, 33 Melodien enthaltend, mit.

この「33のメロディー」はエクトル・ベルリオーズ Hector Berlioz (1803-1869) の《32のメロディー Collection de 32 mélodies》H.139 (1863年出版)ではないかと思われる。

³⁶ Wenn Du einen Band des spanischen Liederbuches entbehren kannst, so bitte ich Dich denselben morgen od. längstens übermorgen bei Griensteidl zu deponieren, ... ich ein solches jetzt dringend brauche.

³⁷ In aller Eile: schicken Sie mir umgehend 20 fl.

この書簡は数字が不明確なため、アンドレアス・ドルシエル Andreas Dorschel は「26フローリン」と読んでいる (Dorschel 1992:53。書簡のファクシミリも同ページに掲載されている。邦訳ではドルシエル 1998:85に掲載。)

く二つある。ひとつはヴォルフのアメリカ行きに対する支援である。ウォーカーによると、彼は既に1883年に一度、アメリカに渡ろうと考え、エックシュタインの友人であるアルトゥール・ゲープハルト Artur Gebhardt (生没年不明) がお膳立てをした。ゲープハルトはアメリカ人とのハーフであり、彼の息子は絹商人で、ニューヨークに会社の支店を持っていたのである。ヴォルフはアメリカ行きの切符も買って後は出発するだけとなったが、最後の瞬間に決意を翻し、取り止めにしたのだった (Walker 1992:145-146)。この計画はしかし、1894年の春になって再燃した。その理由は弟のギルバート Gilbert (1862-1938) と、当時ヴォルフが交際していた歌手のフリーダ・ツェルニー Frieda Zerny (1864-1917) にあった。ヴォルフ兄弟の父親フィリップ Philipp (1828-1887) は皮革工場を営んでいたが、ギルバートは彼の仕事を継いだ後、1891年にはアメリカに渡り、その後クロム鞣し革に関する発明をして生活を送っていた (Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft 2011, 4:LXXVII)。

当時ギルバートから書簡を受け取ったヴォルフは、その内容をツェルニーに宛てて、次のように伝えている。「昨日、アメリカから弟の便りを受け取った。彼は何度も、こちらへ来てコンサートを開催するよう勧めてくれている。ドイツでは芸術は良く洗練されているが、アメリカではひとえに金目当てだ、と書いている。出掛けて行って、略奪を働くってというのはどうだろう？ 上手く行くはずだと思うのだが。³⁸⁾」 (Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft 2010, 2:321、ツェルニー宛書簡 1894年3月1日付)。こうしてヴォルフは、ツェルニーと二人で、新天地で生活を始めたいという夢を思い描くようになった。この頃、友人のエーミール・カウフマン Emil Kauffmann (1836-1909) に宛てた書簡には「「私たちは」今、大きな計画を胸に温めています。(中略) そのことから私たちは、ドルの確かな基盤の上にしっかりした生計を築くために、黄金の国アメリカに旅立とうと決めたのです。³⁹⁾ (文中の鍵括弧による強調は原文に拠る)」 (ibid. 2010, 2:335、カウフマン宛書簡 1894年3月7日付) と書かれている。しかし、実際、単にアメリカに渡っただけですぐに「しっかりした生計」が成り立つわけは無いであろうことを踏まえ、ヴォルフはまたもやエックシュタインに支援を依頼した。これを受けて、エックシュタインはヴォルフに「金持ちの芸術に理解あるアメリカ人の家族に宛てた推薦状⁴⁰⁾」

³⁸⁾ Gestern erhielt ich Nachrichten von meinem Bruder aus Amerika. Er rät mir zum wiederholten male hinzukommen u. dort zu konzertieren. Er schreibt mir, daß in Deutschland die Kunst wohl gepflegt, einzig u. allein aber in Amerika nur bezahlt wird. Wie wärs, wenn wir uns doch aufmachten u. einen Raubzug inscenirten? Ich denke, es müsse gelingen.

エルンスト・ヒルマー Ernst Hilmar とヴァルター・オーバーマイヤー Walter Obermaier に拠る先行研究では、書簡の差出人は、ヴォルフの兄であるマックス Max (1858-1915) としており (HILMAR, Ernst; OBERMAIER, Walter (Hrsg.) 1978:66)、それを受けて筆者も2012年の論文で差出人をマックスとした (梅林 2012:66)。この書簡自体は残っていないが、同日付でヴォルフが書いた母親のカタリーナ宛の書簡には「ギルバートから昨日手紙を受け取りました。彼はまた、上手く行かなくなっているように思えます。(中略) ひょっとすると、一度彼をアメリカに訪ねるかもしれません。 Von Gilbert erhielt ich gestern ein Schreiben. Es scheint ihm wieder schlecht zu gehen, ... Vielleicht besuche ich ihn einmal in Amerika.」 (Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft 2010, 2:319、母親宛書簡 1894年3月1日付) との文章がある。また、マックスはヴォルフとあまり仲が良くなく、アメリカに行った経験があるかも不明であるため、この書簡の差出人は、マックスではなくギルバートと考えるのが妥当であろう。

³⁹⁾ „Wir“ tragen uns jetzt mit großen Plänen herum. ... Wir haben daher beschlossen in's Goldland nach Amerika zu reisen, um auf der sichern Basis von Dollars uns eine solide Existenz zu gründen.

カウフマンは、テュービンゲンで活動した指揮者で作曲者。

(ibid. 332. ツェルニー宛書簡 1894年3月4日付)を与え、彼のために「ボストンの興行主の最も抜きんでた者のひとり⁴¹⁾」(ibid. 336. ツェルニー宛書簡 1894年3月7日付)に手紙を書くこととしたのだった。しかし、このような親切的な支援にも関わらず、ヴォルフはまたしてもアメリカ行きを断念してしまう。その理由は、6月に入って急速にツェルニーとの仲が冷めてしまったこと(梅林 2012:71-72)と、11月にギルバートがアメリカから帰国したこと⁴²⁾の両方にあると考えられる。こうして幻と終わったアメリカ行きではあったが、少なくともエックシュタインは、ここでもヴォルフの後ろ盾になろうと努力したのであった。

そして、エックシュタインのもうひとつの大きな支援は、このアメリカ帰りのギルバートに対してである。ギルバートの帰国は、アメリカでの仕事が完全に傾いてしまったことにあるようで、ウィーンにやって来た彼を、ただでさえ身入りの少ないヴォルフが経済的に援助しなければならなくなってしまった(Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft 2011, 4:8)。しかし、ヴォルフ自身が友人・知人の家を渡り歩いて作曲をしているような状況で弟を養えるはずも無く、早くも翌月には、ギルバートと彼の発明をエックシュタインに紹介した旨、妹ケーテ Käthe (1865-1944)宛の書簡(ibid. 2010, 2:529)で述べている。エックシュタインは、本稿の冒頭で述べたように、父親の設立した製紙工場の共同経営者であったが、この工場は主にパラフィン紙のような防水・耐脂性の紙を製造しており、エックシュタインも化学者として、製品開発などに取り組んでいた。そして、エックシュタインはギルバートのクロム鞣し革に関する発明が、このような紙の製造に役立つと考えたようで、遅くとも翌1895年1月には、ギルバートを彼の会社に雇い入れるのである。ギルバートの仕事の様子を、ヴォルフは次のように母親カタリーナ Katharina (1824-1903)に報告している。「彼〔ギルバート〕は、私の友人エックシュタインの実験室にいますので、恐らく彼はジーベンブルンネン通りの近くに部屋を借りるでしょう。(中略)エックシュタインは、月200フローリンで企業の共同経営者をしていますが、さしあたってギルバートは彼から収入を得ているのです。それでもって、ギルバートは豪華にやっているのです。⁴³⁾ (文中の〔 〕内は筆者が挿入)」(ibid. 2010, 2:549, 母親宛書簡 1895年1月12日付)。「3. 2. 1. 物質的支援」でも記したように、エックシュタインはジーベンブルンネン通り15番地に住んでおり、当時、彼の家にはヴォルフ本人も居候していたわけで、まさに兄弟揃ってエックシュタインの世話になったのである。しかもヴォルフは、ギルバートがエックシュタインから給料を得る身となるとすぐに、次のような依頼をしている。「我が親愛

⁴⁰⁾ ... Empfehlungsbriefe an reiche kunstgewogene amerikanische Familien...

⁴¹⁾ Einer der hervorragendsten Impresarios Bostons...

この人物については、ドイツ生まれのボストンで活躍していた指揮者兼フルーティストのカール・ツェラーン Carl Zerrahn (1826-1909)で、エックシュタインは彼にヴォルフを推薦したようだと考えられている(Hilmar; Obermaier 1978:68)。

⁴²⁾ 1894年11月13日付で、ヴォルフが妹アドリエンネ Adrienne (1867-1923)に宛てた書簡に、ギルバートがアメリカから戻って来たことと記されている(Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft 2010, 2:517)。

⁴³⁾ Wahrscheinlich wird er ein Zimmer in der Nähe der Siebenbrunnengasse miethen, da er im Laboratorium meines Freundes Eckstein, ... Einstweilen bezieht Gilbert von Eckstein, der sich an dem Unternehmen beteiligt 200 fl pro Monat. Damit kann Gilbert prächtig auskommen.

なる弟のギルバート氏は、私に借りた20フローリンを返すそぶりを見せず、また私はこの金
 が今まさに必要なので、君に上述の額を送ってくれるようお願いする。そうすれば君は、月給
 の支払いの際に、ギルバートから清算できるだろう。⁴⁴」(ibid. 550、エックシュタイン宛書簡
 1895年1月15日付)。ギルバートの雇用は、1897年2月頃に、彼がプレスブルクで工場長と
 して任用されるまで続いた(ibid. 3:349。母親宛書簡1897年3月14日付)ようだが、このよう
 な書簡の記述からは、弟共々エックシュタインに頼りきりになっていた状況が浮かび上がって
 くる。

4.2. エックシュタインに対する評価

このように、エックシュタインは大変気前の良い友人兼支援者であったわけだが、ヴォルフ
 はそもそもエックシュタインが属する「ユダヤ人」を肯定的に評価してはいなかった。ユダ
 ヤ人に対する批判は、ヴォルフの音楽批評文にも見られる⁴⁵し、またエルンスト・デチャイ
 Ernst Decsey によるヴォルフの最初の評伝には、次のようなユダヤ人ジャーナリストとヴォル
 フとのやりとりが、時期は不明ではあるが紹介されている。「『ねえ、ヴォルフさん、あなたは
 今も尚、以前から引き続いてのはなはだしい反ユダヤ主義者なのですか?』ヴォルフは質問者
 をナイフのように鋭く見つめた。「前よりもっとだ!」⁴⁶」(Decsey 1904:90)。このような事実
 や逸話から、1980年代以降のヴォルフの伝記作家であるクルト・ホノルカ Kurt Honolka、アン
 ドレアス・ドルシェル Andreas Dorschel、ディートリヒ・フィッシャー=ディスカウ Dietrich
 Fischer-Dieskau もヴォルフの反ユダヤ主義について言及しているが、概ね皆の見解は似通って
 おり、反ユダヤ主義をはっきりと打ち出していたリヒャルト・ヴァーグナー Richard Wagner
 (1813-1883)の熱烈な信奉者であった「フーゴー・ヴォルフは、〔ユダヤ人の〕アダルベルト
 ・フォン・ゴルトシュミット⁴⁷、フリードリヒ・エックシュタイン、ヨーゼフ・ブロイアー⁴⁸、
 シャイ男爵⁴⁹、革工場主のフリッツ・フレッシュ⁵⁰に甘やかされ、グスタフ・マーラー⁵¹にピ
 アノのレンタル料を払わせていても、彼の師に従っていた⁵²(文中の〔 〕内は筆者が挿入)」
 (Honolka 1990:91)だけであり、これは「純然たるヴァーグナーの虜である証⁵³」(Fischer-Dieskau
 2003:126)に過ぎないと考えている。

⁴⁴ Da mein theurer Herr Bruder Gilbert gar keine Miene macht, mir die geborgten 20 fl zurückzuzahlen und ich die Summe gerade jetzt benötige, ersuche ich Dich um freundliche Zusendung besagter Summe, die Du dann Gilbert bei der Auszahlung seiner Monatsgage verrechnen magst.

⁴⁵ 例えば、1886年4月25日付の「コンサート Concerte」と題された音楽批評文(Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft 2002, 1:153)など。

⁴⁶ ... „Na, Wolf, sind Sie noch immer der stramme Antisemit von früher?“ Wolf sieht den Frager messerscharf an: „Mehr denn je!“

⁴⁷ Adalbert von Goldschmidt (1848-1906)。作曲家。

⁴⁸ Joseph Breuer (1842-1925)。精神病理学者。

⁴⁹ ヨーゼフ・シャイ Joseph Schey (1853-1938)。法律学者。

⁵⁰ Fritz Flesch (1854-1890)。革工場ジグムント・フレッシュ Sigmund Flesch & Co. の共同所有者。

⁵¹ Gustav Mahler (1860-1911)。作曲家。

⁵² Hugo Wolf folgte seinem Meister, wenn er sich von Adalbert von Goldschmidt, Friedrich Eckstein, Josef Breuer, Baron Schey, dem Lederfabrikanten Fritz Flesch verwöhnen und von Gustav Mahler die Miete eines Klaviers bezahlen ließ.

それではヴォルフは、ユダヤ人であるエックシュタイン個人については、どのように考えていたのだろうか。ヴォルフは、1894年に交際していたツェルニーがウィーンを訪問する際、彼女の宿泊先について「僕は彼〔エックシュタイン〕が自分の家族のところに — もっとも彼らはユダヤ人だが — 君を泊めてくれそうに思えた。(文中の〔 〕内は筆者が挿入)⁵⁴」(Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft 2010, 2:349. ツェルニー宛書簡 1894年3月14日付)と述べている。この提案に対して、現在では残されていないが、ツェルニーは何らかの返事をしたものと考えられる。この返信に、ヴォルフはさらに以下のように答えたのである。「もう一度住まいの問題に触れ、前回の手紙でのエックシュタイン家に宿を取る件について、君に断固として思いとどまるよう忠告したい。君はつまり、エックシュタイン家の人々は感じの良いユダヤ人に属しているかと尋ねているのだろうか？ この答えとして、僕はきっぱりノーと答えなければならない。君の生来の美的感覚とリズム感では、家族のぞっとするようなユダヤ訛りに遂には我慢できなくなるだろう。道徳的な性質においては、彼らはあらゆる検査に合格すると判定される。しかし君のような趣味の良い感覚を表現できるとなると、非常に疑わしい。僕の友人であるエックシュタインは、特に人相を除いては、完全にユダヤ人から自由になっている。しかし残念ながら、彼の家族については同じだと主張できない。エックシュタインの家族の様に気立てが優しく、慈悲深い人たちは世界中で探し求められる。それにも関わらず、君は彼らとの共同生活で、快適とは感じられないだろう。というのは、ある人種特有のことがらで、いつも君に不快感を与えるからだ。⁵⁵ (文中の下線は原文に拠る)」(ibid.352-353, ツェルニー宛書簡 1894年3月17日付)。

この書簡を見る限り、ヴォルフの反ユダヤ主義的主張は、単なる理念の枠を越え、具体的な形でエックシュタインの家族にも及んでいる。ホノルカは、「ともかくもヴォルフは、この手紙において、エックシュタイン家の高い道徳的質を褒めることにおいては、このように公平であった。⁵⁶ (文中の斜字体は原文に拠る)」(Honolka 1990:91)というヴォルフに対して好意的な見方をしてはいるが、全体としてこの文章を見るならば、とても「公平」とは言い難い。しかし、特にこの書簡で興味深いことは、家族については人種的な非難を繰り返しているヴォルフが、エックシュタイン本人を基本的にそこから除外しているという点である。1通目の書簡の後、ツェルニーがどのような返事を書いたのかは推測の域を出ないが、少なくともヴォルフ

⁵³ ... Zeugnisse einer absoluten Wagner-Hörigkeit...

⁵⁴ Es schien mir, als wäre er geneigt, Dich bei seiner Familie, die allerdings Juden sind, unterzubringen.

⁵⁵ Um noch einmal die Wohnungsfrage zu berühren möchte ich Dir auf Deinen letzten Brief hin ganz entschieden abrathen bei Ecksteins abzusteigen. Du fragst mich nämlich ob Ecksteins zu den angenehmen Juden gehören? diese Frage muß ich entschieden verneinen. Bei Deinem angeborenen Schönheitssinn u. Taktgefühl wird Dir das fürchterliche Gemaschel der Familie auf die Dauer unerträglich sein. Auf ihre moralischen Qualitäten geprüft werden sie jede Probe bestehen. Ob sie aber auch Deinem aesthetischen Sinne zusagen werden, möchte ich sehr bezweifeln. Mein freund Eckstein selbst hat sich bis auf seine äußere Physiognomie vom Judenthum vollständig emanzipiert. Dasselbe kann man aber von seiner Familie leider nicht behaupten. Gutherzigere u. mildthätigere Menschen als die Familie Eckstein kann man in der Welt suchen; dennoch wirst Du Dich in ihrer Gemeinschaft nicht wohl fühlen, weil gewisse spezifische Rasseneigenthümlichkeiten Dich immer wieder beleidigen werden.

⁵⁶ Immerhin war Wolf so fair, in demselben Brief die hohen *moralischen Qualitäten* der Familie Eckstein zu rühmen.

に「君はつまり、エックシュタイン家の人々は感じの良いユダヤ人かと尋ねているのだろうか？」と書かせるような内容であったことを考えると、ツェルニーもなんらかのユダヤ人に対して否定的な見解を持っていたのではないかと推測できる。そのように考えるならば、あくまで理念的な反ユダヤ主義者であったヴォルフは、ツェルニーがエックシュタイン家に宿泊することでなんらかのトラブルが起きることを恐れ、本来エックシュタインや家族といった特定の個人を非難する意図は無かったにも関わらず、敢えて愛するツェルニーの考えを汲んで合わせつつ、他所に泊まるよう誘導したと読むことも可能であろう⁵⁷。

この書簡の一部は、先にも挙げたヴォルフ伝記作家のホルカやドルシェルがヴォルフの反ユダヤ主義的考えを示す証拠として示しているが、逆に言うと、この書簡以外には、エックシュタイン宛てはもちろんのこと、他の友人などに宛てた書簡のなかでエックシュタインについて書かれた全ての記述を見ても、エックシュタインに係るユダヤ人批判は全く現れて来ない。そのため、このような見解は、ヴォルフのエックシュタインに対する隠れた本音とは考え難い。ヴォルフにとっての反ユダヤ主義は、あくまでもヴァグネリアンであることと対になっている理念であり、実際のところ、その時々の方分の表明や人との付き合いに利用されることはあっても、根本的な対人関係に影響を与えるものではなかった⁵⁸。そのため、ヴォルフは反ユダヤ主義の考えと関係なくエックシュタインと大変に良い関係を築き続けることができたのである。

5. まとめ

本研究では、エックシュタインの著書とヴォルフの書簡における記述を主な対象として、友人としての付き合いが根本にはありながらも、音楽愛好家と作曲者という関係にあった両者双方の視点から、エックシュタインとヴォルフの関わりについて考察してきた。

エックシュタインのヴォルフに対する支援は、人物などの紹介と、物質的・金銭的な支援の二種類に分けられる。人物などの紹介としては、エックシュタインの著書にはヴォルフとブルックナーとの会食の設定が生き生きと描かれると共に、かなり控えめにはあるが出版社の紹介についてが言及されている。一方ヴォルフの書簡には、特にアメリカ行きを考えていた際に、当地で必要となるであろう後ろ盾の人物紹介依頼に関する記述が見られる。また、物質的支援としては、エックシュタインの著書では住まいの提供、蔵書の貸し出しに関する逸話が紹介されており、これはヴォルフの書簡においても同様に見られる事項である。最後の金銭的支援については、エックシュタインはその慎ましやかな性格を反映してか全く触れていないため、特に楽譜出版に関する彼の支出については、先行研究でも評価が分かれている部分がある。一方

⁵⁷ 最終的にツェルニーは、ウィーン市内のホテル・ド・フランスに宿泊したようである。(Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft 2010, 2:354. ツェルニー宛書簡 1894年3月19日付)

⁵⁸ ヴォルフはゴルトシュミットのリートについても、彼がユダヤ人であることに関連した辛辣な皮肉を書き残している (ibid. 158-159. 友人のオスカー・グローエ Oskar Grohe (1859-1920) 宛書簡 1893年3月26日付)が、この記述も相当にヴァグナーの影響下にあると言えるだろう。

でヴォルフの書簡には、直接に借金を申し込んでいたり、また弟ギルバートを会社に雇ってもらった上で、ギルバートがヴォルフから借りた金を、ギルバートの給料から差し引きで払うよう頼んだりするなど、具体的な金銭援助依頼の実態を見ることができる。

このように、エックシュタインは人物紹介や物質的支援に重点を置いて著書にエピソードを記しているのに対し、ヴォルフの書簡には物質的支援については同様だが、他にかなり生活に直結した人物紹介や金銭的支援を望み、依頼している様子が現れている。いずれにしても、エックシュタインが寛大にヴォルフの期待に応えている状況は、両者の記述からはっきりと読み取れる。そして、このように様々な支援を行ってきたエックシュタインとヴォルフの関係は、概ね良好であったし、エックシュタインがユダヤ人であったことも、ヴァグネリアンであったヴォルフが反ユダヤ主義を理念としては掲げていたにせよ、その友情に暗い影を落とすことは無かったと考えられるのである。

音楽愛好家は作曲者に様々な種類の支援活動を行っている場合があり、またこのような支えがなければ、作曲者は後世にまで作品を残せなかったのではないかと思われる事例も多々ある。しかし、本稿で考察対象としたエックシュタインの著書を例にとっても、音楽愛好家は自らの行った支援について、様々な理由から必ずしも全てを記録するわけではないため、時の流れのなかで消え去っていく重要な貢献もまた数多くあろう。本研究では、このような音楽愛好家の支援活動の記録と、支援を受けた作曲者の書簡記述を併せて考察することで、一端ではあるが音楽愛好家の支援の実態を明らかにできたと考える。

付記

本稿は、平成 28～30 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 「19 世紀ウィーンにおける音楽愛好家の活動 — F. エックシュタインの貢献と支援の状況」(研究課題番号 16K02241) による研究成果の一部である。

引用・参考文献

- DECSEY, Ernst. 1904. *Hugo Wolf. III. Band: Der Künstler und die Welt.* (2. Auflage). Leipzig: Schuster und Loeffler.
- DORSCHER, Andreas. 1992. *Hugo Wolf* (2. Auflage) (1. Auflage 1985). Reinbeck: Rowohlt Taschenbuch Verlag. (邦訳. ドルシェル, アンドレアス. 1998. 『ヴォルフ』樋口大介訳. 東京: 音楽之友社.)
- ECKSTEIN, Friedrich. 1923. *Erinnerung an Anton Bruckner.* Wien: Universal-Edition (republished by Severus [Hamburg], 2013).
- . 1936. *Alte, unennbare Tage. Erinnerungen aus siebzig Lehr- und Wanderjahren.* Wien: Reichner (republished by Severus [Hamburg], 2010).
- . n.d. Anton Bruckner. System der Musiktheorie. オーストリア国立図書館目録番号: Mus.Hs.29333/1-3.
- FISCHER-DIESKAU, Dietrich. 2003. *Hugo Wolf. Leben und Werk.* Berlin: Henschel.
- HILMAR, Ernst. 2007. *Hugo Wolf. Enzyklopädie.* Tutzing: Hans Schneider.
- HILMAR, Ernst; OBERMAIER, Walter (Hrsg.). 1978. *Hugo Wolf: Briefe an Frieda Zerny.* Wien: Musikwissenschaftlicher Verlag.
- HONOLKA, Kurt. 1990. *Hugo Wolf: Sein Leben, sein Werk, seine Zeit* (2. Auflage) (1. Auflage 1988, Stuttgart: Deutsche Verlags-Anstalt). München: Knauer.
- Internationale Hugo Wolf-Gesellschaft (Hrsg.). 2002. *Hugo Wolfs Kritiken im Wiener Salonblatt.* 2 Bände. Wien: Musikwissenschaftlicher Verlag.
- . 2010, 2011. *Hugo Wolf. Briefe.* 4 Bände. Wien: Musikwissenschaftlicher Verlag.
- JESTREMSKI, Margret. 2011. *Hugo Wolf. Werkverzeichnis.* Kassel: Bärenreiter.

- Österreichische Nationalbibliothek; Internationale Bruckner-Gesellschaft (Hrsg.) . 2003, 2009. *Anton Bruckner. Briefe*. 2 Bände. Wien: Musikwissenschaftlicher Verlag.
- 梅林郁子. 2006. 「フーゴ・ヴォルフの音楽批評におけるベートーヴェン観」『お茶の水音楽論集』特別号: 67-76.
- . 2012. 「フーゴ・ヴォルフの書簡研究 — フリーダ・ツェルニー宛 1894年2月から6月まで」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』63:59-73.
- . 2017. 「A. ブルックナーの音楽に対する F. エックシュタインの支援と貢献」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』68:119-130.
- . 2018. 「S. ゼヒターを巡る音楽的系譜と A. ブルックナーの指導法 — F. エックシュタイン著「音楽理論体系」序文の考察」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』69:79-91.
- WALKER, Frank. 1992. *Hugo Wolf. A Biography* (3rd ed.) (1st ed. 1951, New York: Knopf.) . Princeton, NJ: Princeton University Press.